

不平発話行為の研究の概観と今後の展開

深澤清治

梅木璃子

広島大学大学院教育学研究科

1. はじめに

本稿の目的は、不平発話行為に関する研究が行われてきた過去 30 年の間で、どのように不平発話行為に関する研究が展開されてきたのかを概観することである。

不平発話行為とは、「話し手が、聞き手のとったある行動を好ましくないと判断した際、聞き手に対して不満や苛立ちあるいは非難を表現するための発話行為である」と、Olshtain and Weinbach (1993) は定義している。また Trosborg (1995) も同じように「不平とは、話し手が、ある出来事に対する不満や否定的な感情を、その出来事に責任のある人物（話し手）に対して、直接的又は間接的に表現するための発話行為である」と示している。これらの定義から不平は、聞き手に対する不満を話し手に表現するための発話行為であると考えられる。そのことから、「聞き手に対して、話し手が自らの願望と相容れないことを非難する不平」は、Brown and Levinson (1978, 1987) によって提唱された「聞き手のフェイス（面目）を脅かし、聞き手を非難する行為である Face threatening act (FTA)」であると考えられる。それ故、不平とは、人からよい評価を受けたいというポジティブ・フェイスと、自分の行動の自由を他人から制限されたくないというネガティブ・フェイスの両方を脅かす行動でもある（清水, 2016）。

さらに不平という発話行為は、形式と効力が一致している直接発話行為に限らず、発話で用いられる文が表す字義通りの発話内行為、あるいは他の発話行為を使って間接的に伝える間接発話行為として産出されることがある（Searle, 1979; 清水, 2009）。例えば、DeCapua (1998) や Olshtain and Weinbach (1987) が提唱した不平ストラテジーには、requests for repair（依頼）、criticisms（非難）、accusation and warning（非難と警告）のように、形式的には不平ではない発話行為が不平の発話行為として含まれている。このことから、実際の談話を分析する際は、当該の発話が不平発話行為として遂行されたものか、または他の発話行為とし遂行されたものかを区別するのが難しいとも言われている（Laforest, 2002）。

以上を踏まえると、母語話者に比べて語用論的知識に劣る第二言語学習者にとって、FTA のリスクの高い不平発話行為を遂行するということは、とても大きな試練であると考えられる。そのため、不平発話行為の研究は、より効率的な語用論的知識の習得のために不可欠である。不平発話行為に関する研究の展開を促しているものとしては、中間言語語用論の存在が挙げられる。よって本稿では、中間言語語用論の分野で展開されてきた不平発話行為に関する研究を主に概観する。また、発話行為における話し手と聞き手の両者に関する研究、すなわち話し手に関しては産出（production）、聞き手に関しては認知（perception）の 2 つに大きく分け、これまでの展開を総合的に検討する。

2. 不平の産出研究

本章では、不平の産出に関する研究をまとめる。先行研究における主な研究対象として、「不平ストラテジーの使用傾向」、「発話の直接度 (directness)」が挙げられる。ここでは、それぞれについての代表的な先行研究を取り上げるとともに、不平の産出研究の展開について概観する。最後に、主な不平の産出研究を表3にまとめる。

2.1. 不平ストラテジーの使用傾向に関する研究

第二言語学習者の不平ストラテジーの使用傾向についての研究は、不平の産出に関する研究の大部分を占めている。その中でも、特に代表的な研究として、Olshtain and Weinbach (1987) による研究が挙げられる。Olshtain and Weinbach は、不平は、開始部 (Opening)、主要行為部 (Head Act)、補助部 (Adjunct) の3つの要素で構成されると主張した。さらに、これら3つの中で、実際に不平行為が行われている主要行為部 (Head Act) に着目しながら、自身が考案した5段階 (1が間接的なもので5に向かうほど直接的) による不平ストラテジーの分類表 (表1) を用い、ヘブライ語学習者とヘブライ語母語話者による不平ストラテジーの比較を行った。データ収集方法として discourse completion test が用いられ、設定された場面は予定していた約束に相手が遅れてきたという1場面のみである。結果としては、学習者も母語話者も「2. Expression of annoyance or disapproval」、「3. Explicit complaint」、「4. Accusation and warning」の間においてストラテジー使用に散らばりがみられ、また学習者はよりフェイス侵害のリスクが少ないストラテジーを選ぶ傾向がみられた。

表1 Olshtain and Weinbach (1987) による不平ストラテジーの分類

ストラテジー	目的	例
1. Below the level of reproach (暗示的非難)	Sが暗示的な非難をすることで、直接的な非難をさける。	<ul style="list-style-type: none"> • Such things happened • Don't worry about it, there's no real damage.
2. Expression of annoyance or disapproval (苛立ち・不満の現れ)	SはH・SUAについてはっきりと言及していないが、ある違反行為についてある程度の苛立ちは表現している。	<ul style="list-style-type: none"> • Such lack of consideration! • This is really unacceptable behavior.
3. Explicit complaint (明示的不平)	SはこのカテゴリーでH・SUAについて明らかに言及している。	<ul style="list-style-type: none"> • You're inconsiderate! • One should not postpone this type of operation.
4. Accusation and warning (非難・警告)	Sが聞き手のフェイス脅かしを実行し、Hに対して制裁の可能性をほのめかしている。	<ul style="list-style-type: none"> • Next time, I'll let you wait for hours.
5. Immediate threat (差し迫った脅し)	Sが率直にHを攻撃することを選択している。	<ul style="list-style-type: none"> • You'd better pay the money right now. • I'm not moving one inch before you change my appointment.

注 Olshtain and Weinbach (1987, pp. 199-202) を基に筆者が作成。SはSpeaker, HはHearer, SUAは, socially unacceptable actを表す。

また、DeCapua (1998) は、ドイツ人英語学習者50名、アメリカ人英語母語話者50名を対象に、自身の研究に適した不平ストラテジーを用いて、主要行為部 (Head Act) に着目し、ストラテジー

の使用傾向の比較と使用語彙の特徴について分析を行った。DeCapua自身が以前に行った研究で、特に著しい結果がみられた4つのストラテジーを表2に示す。特に、Olshtain and Weinbach (1987)によるストラテジー分類との大きな違いは、Request for repair や Request for demand といった、間接発話行為としての依頼を用いた不平を加えたことである。その結果、後に続くいくつかの研究においても、Request for repair や Request for demand が不平のストラテジーとして採用されている。DeCapuaの研究結果としては、学習者は表2における「3. Justification」を多用した一方で、英語母語話者はこれをほとんど使用しなかった。このことから、学習者の産出した不平には、母語からの転移が行われたことがわかる。

表2 DeCapua (1998) による不平ストラテジーの分類

ストラテジー	目的	例
1. Request for repair (修正を依頼)	聞き手に、何らかの方法で問題を修正するよう依頼する。	Could you get me in to see the doctor or make me another appointment?
2. Demand for repair (修正を要求)	聞き手に、問題を修正するよう要求する。	I think you should give me a new appointment.
3. Justification (正当化)	話し手の立場、または修正の為の依頼や要求について、弁護、正当化、あるいは支持する。	... but you're supposed to be professional.
4. Criticism (非難)	聞き手が起こした問題について、直接的に非難する。この行為は、FTAにあたる。	You've ruined my coat!

注 DeCapua(1998) を基に筆者が作成。

他にも、Rinnert, Nogami, and Iwai (2006) は、日本人英語学習者 100 人、アメリカ人英語母語話者 100 人を対象に、ストラテジー選択の要因の傾向と適切な不平ストラテジーの選択に関して、主要行為部 (Head Act) に加え、開始部 (Opening) と補助部 (Adjunct) の計 3 つの不平の構成要素が、どのように不平の発話行為に影響を与えるのかを分析している。さらに、Trosborg (1995) は、デンマーク人英語学習者とイギリス人英語母語話者に対して、不平ストラテジーの使用傾向についてロールプレイを用いて研究を行った。その結果、学習者は使用するストラテジーの数に限りがあり、緩和手段、補助部の使用も少ないなど、社会的関係に応じて適切な不平という発話行為を遂行できていないことが明らかになった。

2.2. 発話の直接度に関する研究

次に、不平の直接度に関する研究を概観する。Trosborg (1995) は、不平の直接度について「不平という発話行為において、話し手は、その状況や場面に適した直接度を選択することで、聞き手と衝突する可能性をどの程度不平に持たせるか決めることができる」と述べている。一方で「聞き手は、不平が産出される状況や場面の文脈を基に、“字義通りの内容”と“字義に含意している内容”の二つをつなぎ合わせて、話し手の意図を推測しなければならない」とも述べている。そして、Trosborg は、不平の直接度の決め手になる要因として以下の 5 点を挙げている。不平の度合いとしては、1 が最も直接度が低く、5 が最も直接度が高いとされる。

P : Propositional content (侵害行為の内容), S : Speaker (話し手), H : Hearer (聞き手)

1. 話し手が, 聞き手に対して不満の内容を表わしているか否か

(P describes/does not describe the complainable)

Odd, my blouse was perfectly clean last night. There's a stain on my blouse.

2. 話し手が, 不満の内容に対して否定的な評価を表しているか否か

(P is bad — articulated or implied)

This stain won't ever come off.

3. 話し手が, 聞き手が行った行動 (侵害行為) の内容 を表しているか否か

(H has done P — articulated or implied)

You have ruined my blouse.

4. 話し手が, 聞き手の行動に対して否定的な評価を表しているか否か

(S evaluates H's action as bad — articulated or implied)

I think it's mean that you just take my things.

5. 話し手が, 聞き手の人格に対して否定的な評価を表しているか否か

(S evaluates H as a bad person — articulated or implied)

You are really mean.

これまでは、依頼など不平以外の発話行為における直接度の研究に比べ、不平発話行為における直接度の研究は少なかった。しかし、近年少しずつ不平における発話の直接度についての研究が増えてきている。例えば、Rinnert et al. (2006) は、日本人英語学習者 100 名、アメリカ人英語母語話者 100 名を対象に、英語による不平の産出を求め、さらに日本人英語学習者に対しては、日本語でも不平の産出を求めた。不平の直接度は 3 段階に分けられ、各グループによるそれぞれの不平の直接度が分析された。その結果、特に社会的関係が同等で相手との心的距離が近い場合、日本人英語学習者による日本語または英語での不平は、アメリカ人による不平より直接的であることがわかった。

また、Ho, Henry, and Alkaf (2012) は、マレー語を母語とする英語学習者 10 名、英語母語話者 10 名を対象に、oral discourse completion test を用いて各グループによる不平を収集した。House and Kasper (1981) によって提唱された「不平の直接度を強める upgrader」に加え、「直接度を緩和する downgrader」を示すモダリティーリストを用いて、被験者によって産出された不平の直接度を分析した。その結果、英語学習者が直接度を緩和するべきだと考えたとき、学習者は相手をおだてるような表現を好むということが示された。

このように、不平の直接度には、話し手と聞き手の両者が関わるため、直接度は不平の産出と認知を繋ぎ合わせるものであるとも考えられる。今後、Trosborg (1995) が提唱したような直接度が、不平の産出研究と認知研究との橋渡しとして機能していくものと考えられる。

2.3. その他の研究

2.2. でも紹介した Rinnert et al. (2006) は、不平の直接度だけではなく、発話を構成するものとして、「開始部 (Opening)」、「主要行為部 (Head Act)」、「補助部 (Adjunct)」の 3 つの要素を取り上げており、日本人英語学習者 100 人、アメリカ人英語母語話者 100 人によって産出された英語をそれぞれ分析した。その結果、日本人英語学習者が産出した不平には、アメリカ人英語母

語話者に比べて「開始部 (Opening)」が少ないことが明らかになった。このような「発話の構成」や「発話の意味公式」を対象にした研究は、他の発話行為については多くみられるが、不平発話行為についてはあまりみられない。

また、学習者が使用する語彙の特徴を分析する場合もある。2.1. で紹介した DeCapua (1998) においては、「Request for repair」の使用に際し、英語母語話者は *should* を用いたのに対し、学習者は *must* や *have to* を用いており、学習者の母語による転移がみられたことが明らかになった。また Nakabuchi (1996) は、日本人英語学習者が日本語で産出した不平と英語で産出した不平を比較した。その結果、語彙の使用において母語による転移がみられることを示している。このように、学習者が使用する語彙の特徴を分析する研究は少なくないが、その多くは、語彙が分析の主たる対象であるわけではなく、学習者言語の分析を進める過程の1つとして使用語彙の特徴について分析が行われているため、どちらかと言えば分析方法の1つという方が正しいかもしれない。

表3 主要な不平の産出研究

研究	被験者	対象言語	分析対象	研究方法	主な結果
Olshtain and Weinbach (1987)	上級ヘブライ語学習者 35 名, ヘブライ語母語話者 35 名	ヘブライ語	不平ストラテジーの使用傾向	DCT	英語学習者も母語話者も使用するストラテジーの種類は同じだが、学習者はより FT のリスクが少ないストラテジーを選ぶ傾向がみられた。
Murphy and Neu (1996)	韓国人英語学習者 14 名, アメリカ人英語母語話者 14 名,	英語	不平ストラテジーの使用傾向	DCT	英語学習者は、「不満」ではなく、母語話者がほとんど使用していなかった「批判」を使う傾向がみられた。
Nakabuchi (1996)	日本人英語学習者 39 名	英語, 日本語	日本語と英語における不平ストラテジーの使用傾向	DCT	学習者は日本語よりも英語において、より直接的なストラテジーを用いた。また、社会的関係がある場面においても日本語より英語では直接的な表現を用いる傾向がみられた。
DeCapua (1998)	ドイツ人英語学習者 50 名, アメリカ人英語母語話者 50 名	英語	不平ストラテジーの使用傾向, 使用語彙の特徴	DCT	英語学習者は「Justification」を多用した一方で、母語話者はほとんど使用しなかった。また、「Request for repair」の使用に際し、母語話者は <i>should</i> を用いたのに対し、学習者は <i>must</i> や <i>have to</i> を用いており、母語からの転移がみられた。
Rinnert, Nogami, and Iwai (2006)	日本人英語学習者 100 名, アメリカ人母語話者 100 名	英語	不平発話行為の構成, 発話の直接度, 緩和表現の頻度	DCT	母語話者に比べ、英語学習者は不平の発話において開始部の使用が明らかに少なかった。また、友人に対して不平を産出する場面で、学習者は緩和表現の使用の必要性を見出すことができなかった。

注 DCT は discourse completion test を、FT は face threatening を表す。

3. 認知研究

本章では、不平の認知 (perception) についての研究、すなわち聞き手にとってどのように不平が受け入れられるかという点に着目した研究を取り上げる。その後、不平以外の発話行為ではどのように認知研究が展開されてきたのかを紹介する。

3.1. 不平発話行為の認知研究

本節では、不平発話行為の認知研究についてまとめる。まず、Murphy and Neu (1996) の研究は、不平の認知研究の中で一番注目されているものと言える。この研究では、ドイツ人英語学習者が産出した不平がどのように英語母語話者によって判断されるかという、Cohen and Olshtain (1981) が行った研究を参考に、韓国人英語学習者 14 名が産出した不平をまとめ、その典型例をアメリカ人英語母語話者 27 名がどのように容認するか検証した。その結果、アメリカ人英語母語話者は、韓国人英語学習者の不平が挑発的で不適切であると評価した。

また、Ho et al. (2012) は、House and Kasper (1981) が提唱した不平の直接度を測るための尺度に基づき、マレー語を母語とする英語学習者と英語母語話者を対象に分析を行った。調査においては、1つの場面が設定され、直接度の異なる8つの不平発話行為に対して、5段階尺度形式のアンケートによって発話の容認性が判断された。調査の結果、英語母語話者は、間接的で緩和表現を用いた不平は、内容が曖昧になることから不平としては効果的ではないと判断した。これらの先行研究は表4のとおりにまとめられる。

表4 不平に関する認知研究

研究	被験者	分析対象・方法	主な結果
Murphy and Neu (1996)	韓国人英語学習者 14 名, アメリカ人英語母語話者 14 名, その他アメリカ人英語母語話者 27 人	分析対象: 使用するストラテジーの傾向, 韓国人学習者の発話に対する英語母語話者の容認性判断 方法: oral discourse completion test, acceptability judgement test	・韓国人英語学習者は「不満」より「批判」を使う傾向がみられた。 ・母語話者の容認度として、韓国人英語学習者の不平は、挑発的で不適切であると評価した。
Ho, Henry and Alkaf (2012)	マレー語を母語とする英語学習者 35 人, 英語母語話者 34 人 (2 年以下の滞在歴)	分析対象: 不平の直接度・緩和表現の傾向, 英語学習者と母語話者による、発話行為に関する容認性判断 方法: 5 段階尺度形式のアンケート	・間接的で、緩和表現を用いた不平は、曖昧であることから不平としては効果的でない。 ・極端に攻撃で無礼な不平発話行為は、不平として度が過ぎることから、不平として成り立たない。

注 Olshtain and Blum-Kulka (1985), Murphy and Neu (1996), Ho, Henry and Alkaf (2012) を参考に筆者が作成。

3.2. 不平以外の発話行為における認知研究

本節では、不平以外の発話行為に関する代表的な認知研究を取り上げる。まず、認知研究の元になっている研究として、Olshtain and Cohen (1983) が挙げられる。彼らは、ヘブライ語母語話者 160 名、ヘブライ語学習者 124 名、英語母語話者 172 名を対象に、「謝罪」発話行為に焦点を当て、ポライトネス理論に基づいた認知の比較を行った。その結果、言語学習者や母語話者が遂行する発話行為についての理解を深める為には、ある発話行為に対して相手がどのように受け止めるか（認知）を明らかにする必要があること、また、話し手と聞き手の認知の違いにより、話し手の意図が聞き手に上手く伝わらない可能性があることや、話し手に関する研究のみならず聞き手に関する研究も平行して行うべきであることを示した。

また、Olshtain and Blum-Kulka (1985) は、ヘブライ語母語話者 160 名、ヘブライ語学習者 124 名、英語母語話者 172 名を対象に、「謝罪」と「依頼」の発話行為に着目し、5 段階尺度形式のアンケートを用いて、ヘブライ語母語話者によって遂行された 2 つの発話行為に対する英語母語話者とヘブライ語母語話者の容認度の比較を行った。場面設定として、Brown and Levinson (1978) によって提唱されたフェイス侵害リスクの要素である相手との心的距離 (distance)、力関係 (power) を基に各発話行為に 4 場面ずつ設定し、distance と power が発話行為にどのような影響をもたらすかも検証した。その結果、アメリカ人英語母語話者は相手との社会関係を配慮し negative politeness に基づいた発話が適切であると判断した。一方で、イスラエルの文化は比較的直接的且つ positive politeness 志向であることから、ヘブライ語母語話者は、negative politeness だけではなく positive politeness に基づいた発話が適切であると判断した。

これらの研究をきっかけに、「謝罪」、「依頼」、「断り」といった発話行為において、認知研究は大きく展開し、近年においては、発話行為に重きを置いた研究が次々と増えてきている (Takahashi, 1996; Félix-Brasdefer, 2008)。

近年の研究に目を向けてみると、Ren (2014) により、イギリスの大学で修士課程に所属している中国人英語学習者 20 名を対象に、目標言語を使用するコミュニティへの 1 年間の留学によって、断りに対する認知にどのような変化がもたらされるかについて、縦断的な研究が行われた。用いられた手法は、discourse completion test, concurrent verbal report, retrospective verbal report である。研究の結果、学習者は留学を通して社会語用論的 (sociopragmatic)、且つ語用言語学的 (pragmalinguistic) 特徴に違いがあることに気付くことができるようになること示された。また、目標言語を使用するコミュニティにおいて、社会的立場関係を自ら体験することは、対話者と力関係が同じような場面における言語使用において肯定的な影響をもたらすことも示された。

さらに近年では、メールにおける発話行為の認知研究も増えてきている。Economidou-Kogetsidis (2011) は、英語母語話者の 11 名の教授を対象に、200 人のギリシャのキプロス人の大学生から送られてきた英語のメールの中で産出された「依頼」がどのように認知されるのかを、18 ヶ月に渡って調査した。その結果、メールの最後に *thank you* と示さないことに関して、特に否定的な評価をする教授が多くみられた。また、*as soon as possible* という表現は母語話者からは、*upgrader* として評価されるだけでなく、無礼であるという印象を与えていた。これらの先行研究をまとめると表 5 になる。

表5 不平以外の発話行為における認知研究

研究	被験者	対象言語	対象	研究方法	結果
Olshtain and Blum-Kulka (1985)	ヘブライ語母語話者 160 名, ヘブライ語学習者 124 名, 英語母語話者 172 名	英語	ポライトネスに基づいた発話に対する, 英語母語話者とヘブライ語母語話者の容認度の比較	5 段階尺度形式のアンケート	イスラエル文化は比較的直接的, 且つ positive politeness 志向であることから, ヘブライ語母語話者は, negative politeness に加え positive politeness に基づいた発話が適切であると判断した。
Félix-Brasdefer (2008)	アメリカ人スペイン語学習者 20 名 (全員男性)	スペイン語	「断り」に関する認知の傾向	オープンロールプレイ, RVR	留学経験によって, 目標言語を使う地域へ留学経験のある 18 名の被験者が, 文化の違いに気付くことができたと報告した。しかし, 社会的立場が同等の相手には, 違いに気づいているものの, 立場が上の相手に対しては違いに気付くことができなかった。
Economidou-Kogetsidis (2011)	イギリスの 12 の大学に所属する 24 名の講師 (女性 11 名, 男性 13 名)	英語	学習者が作成した直接的な表現を用いたメールに対する, 英語母語話者による認知傾向	5 段階尺度形式のアンケート	メールの最後に <i>thank you</i> と示さないことに関して, 特に否定的な評価をする教授が多く見られた。 <i>as soon as possible</i> という表現は母語話者からは, <i>upgrader</i> として評価されるだけでなく, 無礼であるという印象が与えられる。
Ren (2014)	イギリスの大学で修士課程に所属する中国人英語学習者 20 名	英語	1 年間の留学がもたらす語用論的知識への影響, 認知の変化		学習者は母語よりも英語では, より直接的なストラテジーを用いていた。また, 社会的関係がある場面においても母語より英語では直接的な表現を用いる傾向がみられた。

注 Retrospective verbal report を RVR と表す。

4. 今後の展開の方向性

不平発話行為に関する先行研究を概観した結果、以下の3点が明らかとなった。

- (1) 他の発話行為に比べ、不平はそもそも研究されている数が少ないこと示唆された。このことは、多くの不平研究の中でも触れられており、不平発話へ対する注目がより必要になってくると考えられる。実際に、第二言語学習者と母語話者の間でのコミュニケーションにおいて、学習者が文法的な誤りをしたとき、母語話者は「学習者の言語能力によるものだ」と判断するが、学習者が語用論的な誤りをしたときには、母語話者はただ「学習者は無礼な人間である」と認識すると言われる (Bardovi-Harling & Hartford, 1990)。つまり、各々の文化を背景に適切なコミュニケーションを実現させるには、それぞれの発話行為に対する語用論的な理解が必要である。その中でも不平という発話行為は、話し手が、聞き手のとったある行動を好ましくないと判断した際、聞き手に対して不満や苛立ちあるいは非難を表現するための発話行為であり (Olshtain & Weinbach, 1993)、同時に、話し手と聞き手の社会関係を危険にさらす発話行為でもある (Leech, 1983)。このことから、第二言語を用いたコミュニケーションの必要性が高まる現代において、円滑なコミュニケーションを成功させるには、第二言語学習者は不平発話行為に関して知識を深める必要があると共に、不平発話行為に関する研究の展開がより一層期待されると考えられる。
- (2) 不平の産出研究においては、ほとんどの研究で *discourse completion test* が用いられており、それ以外の手法は、Trosborg (1995) によるロールプレイのみであった。本稿では、研究手法の検討を行うことはできなかったが、今後、なぜ不平発話行為の研究では *discourse completion test* のみが使われているのか、また不平発話行為の産出研究に適した他の研究手法にはどのようなものがあるのかの検討を行いたい。
- (3) また、不平研究の全体を俯瞰すると、産出研究はある程度行われている一方で、認知研究の数は少ない。他の発話行為と比べても、不平における認知研究は圧倒的に少ないことが明らかとなった。不平は、「断り」、「依頼」と同様にフェイス侵害リスクが高い発話行為だからこそ、聞き手がどう受け止めるか、すなわち認知に関する研究が必要となる。この状況は、不平に関する認知研究は希少であり、特に語用論的知識の劣りから社会的立場関係等を捉えにくい第二言語学習者にとってはとても不都合であると考えられる。

これまで不平発話行為は、他の発話行為に比べて日の目を見ない分野であったと考えられる。不平発話行為の産出においては、言語学習者は語用論的知識の欠如が見受けられ、また、その認知においては、学習者は母語話者との違いが存在することにすら気付いていない。言語学習者の語用論的能力の向上を図るためにも、今後、不平発話行為に関する研究、特に認知研究が進展し、中間言語語用論だけでなく第二言語習得の分野にも大きく貢献することに期待したい。

参考文献

- 清水崇文 (2009). 『中間言語語用論概論 第二言語学者の語用論的能力の使用・習得・教育』. スリーエーネットワーク.
- 清水崇文 (2016). 『心を動かす英会話のスキル』. 研究社.
- Bardovi-Harlig, K., & Hartford, B. (1990). Congruence in native and nonnative conversations: Status

- balance in the academic advising session. *Language Learning*, 40, 467–501.
- Brown P., & Levinson, S. C. (1978). Universals in language usage: Politeness phenomena. In E. N. Goody (Ed.), *Questions and politeness: Strategies in social interaction* (pp. 56–289). Cambridge University Press.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- Cohen, A. D., & Olshtain, E. (1981). Developing a measure of socio-cultural competence: The case of apology. *Language Learning*, 31, 113–134.
- DeCapua, A. (1998). Pragmatic transfer and cultural stereotyping. *Issues in Applied Linguistics*, 21–36.
- Economidou-Kogetsidis, M. (2011). “Please answer me as soon as possible”: Pragmatic failure in nonnative speakers’ e-mail requests to faculty. *Journal of Pragmatics*, 43, 3193–3215.
- Félix-Brasdefer, C. J. (2008). Perceptions of refusals to invitations: Exploring the minds of foreign language learners. *Language Awareness*, 17, 195–211.
- Ho, G. D., Henry, A., & Alkaf, N. H. S. (2012). “You don’t seem to know how to work”: Malay and English spoken complaints in Brunei. *Pragmatics*, 22, 391–416.
- House, J., & Kasper, G. (1981). Politeness markers in English and German. In F. Coulmas (Ed.), *Conversational routine: Explorations in standardized communication situations and pre-patterned speech* (pp. 159–185). Mouton: The Hague.
- Laforest, M. (2002). Scenes of family life: Complaining in everyday conversation. *Journal of Pragmatics*, 34, 1595–1620.
- Leech, N. (1983). *Principles of pragmatics*. London: Longman.
- Murphy, B., & Neu, J. (1996). My grade’s too low: The speech act set of complaining. In S. M. Gass & J. Neu (Eds.), *Speech acts across cultures: Challenges to communication in second language* (pp. 191–216). Berlin: Mouton De Gruyter.
- Nakabachi, K. (1996). Pragmatic transfer in complaints: Strategies of complaining in English and Japanese by Japanese EFL speakers. *JACET Journal*, 27, 127–142.
- Olshtain, E., & Blum-Kulka, S. (1985). Degree of approximation: non-native reactions to native speech act behaviour. In S. Gass & C. G. Madden (Eds.) *Input in second language acquisition* (pp. 303–325). Rowley, MA: Newbury House.
- Olshtain, E., & Cohen, A. (1983). Apology: A speech act set. In N. Wolfson & E. Judd (Eds.), *Sociolinguistics and language acquisition* (pp. 18–35). Rowly, MA: Newbury House.
- Olshtain, E., & Weinbach, L. (1987). Complaints: A study of speech act behavior among native and non-native speakers of Hebrew. In J. Verschuere & M. Bertucelli-Papi (Eds.), *The pragmatic perspective* (pp. 195–208). Amsterdam: John Benjamins.
- Olshtain, E., & Weinbach, L. (1993). Interlanguage features of the speech act of complaining. In G. Kasper & S. Blum-Kulka (Eds.), *Interlanguage pragmatics* (pp. 108–122). New York: Oxford University Press.
- Ren, W. (2014). A Longitudinal investigation into L2 learners’ cognitive processes during study abroad. *Applied Linguistics*, 35, 575–594.
- Rinnert, C., Nogami, Y., & Iwai, C. (2006). Preferred complaint strategies in Japanese and English

authentic communication. *Proceedings of the 5th Annual JALT Pan-SIG Conference*, 32–47.

Searle, J. R. (1979). *Expression and meaning: Studies in the theory of speech acts*. Cambridge University Press.

Takahashi, S. (1996). Pragmatic transferability. *Studies in Second Language Acquisition*, 18, 189–223.

Trosborg, A. (1995). *Interlanguage pragmatics: Requests, complaints and apologies*. Berlin: Mouton De Gruyter.

ABSTRACT

Second Language Complaint Realization and Its Future Directions

Seiji FUKAZAWA

Riko UMEKI

The Graduate School of Education

Hiroshima University

This paper reviews previous research in second language (L2) complaint realization. Complaint realization refers to a type of speech act in order to express the speaker's displeasure or dissatisfaction when s/he thinks that the interlocutor's act is unacceptable. Because it is a type of face-threatening act including both negative and positive face, appropriate complaint realization is difficult to achieve for L2 learners.

Research in this field has so far investigated L2 learners' production (their strategy use and directness of speech) when making complaints. Previous studies have shown that L2 learners' strategy use plays a crucial role in complaint realization, and their complaint realization tends to be more direct compared to that of native speakers.

More recent research has focused on L2 learners' perceptions about complaints in the L2. However, compared to traditional production-based studies, the number of perception studies is limited, particularly in L2 complaint research. Therefore, more future research is expected to advance our understanding in this field.